

サンプル問題

銀行業務検定試験

融資推進 3 級

融資推進 3 級の目的

融資の“なぜ”に答えられる人になる。

財務分析などの基本原則を学び、「なぜこの与信判断を下したか」をロジカルに説明する。

→融資審査の判断力向上（感覚ではなく、理論で）

担保・保証の必要性、返済期間などの仕組みを理解し、顧客に納得感をもたせた提案をする。

→顧客との対話力の向上（説明責任の強化）

資金使途・成長戦略との関連性を踏まえた総合的なサポートをする。

→提案力・ソリューション能力の向上（"貸す"から"支える"へ）

サンプル問題は、試験委員会の検討を経ていない、いわゆる未定稿のものであり、かつ出題の一部分です。
おおよその問題内容・程度の目安としていただきたく、ご参考に供するものです。
各問題は内容に関するサンプルであり、実際のCBT試験の画面表示とは異なります。



設問のねらい 融資とは何か ―業務の基本的な用語に関する理解を確認する。

まずは「融資業務とは何か」について、制度・概念・用語・実務の4方向から正しく理解できているかを測ります。
融資業務の役割、金融の分類（直接金融・間接金融）、業務に求められる知識と姿勢を理解することで、専門用語や業界特有の言い回しに強くなり、「融資業務の土台」を構築することができます。

〔融資とは何か〕

問一 1 融資業務に関する以下の記述について、**適切でないもの**は次のうちどれですか。

- (1) 融資業務は、預金業務や為替業務と並ぶ金融機関の三大業務の1つであり、金融機関は融資業務を通じて、預金として集めたお金を金融機関の責任において運用し、企業や個人の経済活動に供給している。
- (2) 企業が財やサービスを生産し、家計がそれらを消費するといった経済活動を行うためにお金を必要としている人のところに、お金に余裕のある人などから融通することを「金融」という。
- (3) 直接金融とは、預金者が金融機関に預けたお金を金融機関自身の判断で企業などへ貸し付けてお金を融通することをいい、重要な金融機能となっている。
- (4) 金融機関本来の業務から得られた収益は「業務純益」という指標で示され、この業務純益は業務粗利益から営業経費と貸倒引当金を差し引いて計算される。
- (5) 企業や個人の要望に応えるには、融資担当者自身の努力が必要不可欠であり、融資担当者は融資商品や融資判断等に関する知識はもちろんのこと、企業を取り巻く環境や業種の特性等を幅広く知っておかなければならない。

正解 (3)

解説 ×「直接金融」 → ○「間接金融」

⇒基本用語を誤って理解していると、上司や顧客との会話で誤解や信頼損失を招きかねません。



設問のねらい 「審査に必要な書類の種類とその妥当性」の判断力を確認する。

融資申込後の審査に必要となる「基本的な提出書類」とその目的・役割について、正確に理解しているかを測ります。
「融資審査に必要な書類」と「その使いどころ」を業務の流れと照らして正しく理解することで、フロント対応におけるスキルの強化につながります。

〔融資審査の必要書類〕

問一 2 法人からの融資申込受付後の審査に必要な書類に関する以下の記述について、**適切でないもの**は次のうちどれですか。

- (1) 定款，登記事項証明書等の本人確認資料
- (2) 会社経歴書・事業経歴書
- (3) 決算書類・資金繰表
- (4) 納税証明書
- (5) 資金使途となる領収書

正解

(5)

解説

×「領収書」 → ○「見積書・売買契約書等」。支払いを行う前の資金使途確認資料が必要となる。

⇒取引先の申込受付時に資料を的確に求めることができれば、その後の審査・実行に遅延が生じてしまいます。



設問のねらい 企業の収益性を読み取る基礎力を確認する。

損益計算書の“読み方”を間違えないために、各利益の意味・順序・評価視点を体系的に理解できているかを測ります。

融資業務の役割、金融の分類（直接金融・間接金融）、業務に求められる知識と姿勢を理解することで、専門用語や業界特有の言い回しに強くなり、「融資業務の土台」を構築することができます。

〔財務分析の要点〕

問一 3 損益計算書に関する以下の記述について、**適切なもの**は次のうちどれですか。

- (1) 損益計算書は、1 年間の収入と支出の結果で、過去から現在までの損益の動きの結果が積み重なって、一定時点での財政状態を表すものである。
- (2) 「利益三段階」の確認は重要であるが、営業利益が赤字であっても最終的に黒字になっている場合は評価できる。
- (3) 売上総利益は売上高から売上原価を控除したもので、仕入値を安くしたり、付加価値の高い製品をつくると売上総利益(率)は向上する。
- (4) 経常利益は経営において事業の採算が成り立っているかを示す、経営にとっては生命線の利益の段階で[売上総利益－（販売費・一般管理費）]で求められる。
- (5) 当期純利益は、事業売却のための売却や大きな損失など特別な損失を考慮しない収益力のバロメータである。

正解 (3)

解説 (1)×「損益計算書」→○「貸借対照表」 (2)×「評価できる」 (4)×「経常利益」→○「営業利益」 (5)×「考慮しない」
 ⇒基本的なところで誤認識をしたり、あるいは「営業赤字でも最終黒字だからOK」といった安易な考えをもったりすることは危険であり、利益構造の偏りや異常値を見抜く力が求められます。



設問のねらい 取引先の危険信号を見抜く力を確認する。

財務指標の意味と取引先の「危険な兆候」を正しく理解できているかを測ります。危険な兆候は、数字だけでなく現場の違和感にも表れます。利益率の動向による企業の“構造的な衰え”だけでなく、数字に表れない“現場で発生している問題”を見抜くことで、将来的に「気になる数字・気になる兆候を発見→ヒアリング→リスク判断」という一連の流れを自律的に行えるようになります。

〔取引先の危険な兆候〕

問一 4 取引先の危険な兆候に関する以下の記述について、**適切なもの**は次のうちどれですか。

- (1) 流動資産が流動負債よりも小さいということは、その会社は短期的な支払能力がない会社であり、この場合は流動比率が100%を上回ることになる。
- (2) 固定長期適合率が100%を下回っている場合、その会社は固定資産の調達に短期の資金で調達されている会社であり、不安定な経営になっている。
- (3) 売上高総利益率が時系列的に低下してきている場合は、業界全体やその会社自体の衰退が進んでいるケースが考えられる。
- (4) 売上高が増えていなくても、在庫が増えれば利益が増加するため問題はないと判断される。
- (5) 経営者の生活が急に派手になったり、優秀な従業員が退職しても事業活動には全く関係ないと考えられる。

正解 (3)

解説 (1)×「上回る」→○「下回る」 (2)×「下回っている」→○「上回っている」 (4)×「問題はない」→○「経営に集中できていない可能性がある」 (5)×「全く関係ない」→「○会社の資金が本業以外に流失したり、経営が不安定になっている懸念がある」

⇒**非財務情報（定性情報）を判断材料とする姿勢は、人との関係性を重視する金融機関職員にとって不可欠なものです。**



設問のねらい 与信判断の実務能力を確認する。

事例問題の〔問－１〕では、取引先に対する資金ニーズの検証能力や、与信判断の洞察力を的確にもっているかを測ります。営業担当者には「資金ニーズの背景を構造的に捉える」「財務状況と資金需要の因果関係を分析する」「経営者の説明に対して表面的に受け取らず裏を取る」といった姿勢が求められており、それを模擬体験的に問うのが本設問の狙いです。

〔増加運転資金における与信判断〕

問－５ 次の事例にもとづいて、〔問－１〕および〔問－２〕に答えてください。

甲銀行融資渉外担当のＤさんは、取引先である(株)Ｌ電子部品製造会社のＹ常務より、当期の運転資金として150百万円の借入申込みを受けた。

Ｙ常務の説明によれば、取引拡大等により売上高が前期の1,800百万円に対して20%増加し、増加運転資金が発生することであった。

Ｄさんはさっそく、Ｙ常務の説明内容および下記の比較貸借対照表（抜粋）にもとづき、借入申込額と増加運転資金の妥当性について検証することにした。なお、Ｌ社の売上の一部は、受注生産である。

《比較貸借対照表（抜粋）》 (単位：百万円)

資産	前期	当期	負債・純資産	前期	当期
現金預金	144	120	仕入債務 (電子記録債務・買掛金)	330	300
売上債権 (電子記録債権・売掛金)	340	510			
棚卸資産	180	215			

(注)電子記録債権割引高 (100) (120)

〔問－１〕 Ｌ社の信用状態を把握するために、Ｙ常務の説明内容や比較貸借対照表（抜粋）の分析を踏まえた上での確認すべき点について、重要度の低いものは次のうちどれですか。

- (1) 販売回収条件が悪化している原因は何か。
- (2) 棚卸資産回転期間に大きな変動はないが、不良在庫は存在していないか。
- (3) 支払条件が厳しくなっている原因は何か。
- (4) 売上増加に伴う商品別の売上動向や採算の状況等はどのようになっているか。
- (5) 取引先との取引条件はどのようなものか。

〔問－２〕 Ｌ社の当期増加運転資金のうち売上高の増加に伴う増加運転資金の金額について、適切なものは次のうちどれですか。

- (1) 33百万円
- (2) 38百万円
- (3) 58百万円
- (4) 164百万円
- (5) 255百万円

→ 解答・解説は次のページ



設問のねらい 与信判断の実務能力を確認する。

事例問題の〔問－2〕では、**計算問題として、売上高の増加に伴う運転資金の増加額を適切に算定する力**を測ります。計算ミスや勘違いを誘いやすい選択肢の中で、正しい論理と手順を踏んで判断できるかという点だけでなく、資金需要の裏にあるビジネス実態を把握する思考力と構造理解が求められている点がポイントです。

〔増加運転資金における与信判断〕

問－5

〔問－1〕

正解 (4)

解説 本件の増加した商品の具体的内容、例えば受注生産の占める割合や販売先・商品別の増加状況・採算の状況等の内容は、今後の販売戦略上は重要であるものの、信用状態の把握には直接つながらないと考えられる。したがって、(4)は最も重要度が低いといえる。
⇒**優先度の低い情報と高い情報を見分ける判断能力は、与信判断に限らず、様々な局面において役立ちます。**

〔問－2〕

正解 (3)

解説

- ・ 前期月商：1,800百万円÷12＝150百万円
- ・ 所要運転資金＝売上債権340百万円＋電子記録債権割引高100百万円＋棚卸資産180百万円－仕入債務330百万円＝290百万円
- ・ 前期所要運転資金の回転期間＝所要運転資金290百万円÷前期月商150百万円＝1.93月
- ・ 当期月商（1,800百万円×1.2）÷12＝180百万円
- ・ 売上高増加に伴う増加運転資金＝平均月商増加額（180百万円－150百万円）×前期所要運転資金の回転期間1.93月＝58百万円
よって、(3)が適切である。

⇒**計算問題では、計算手順や端数処理の正確性が求められます。**